

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5563号

1月号

平成25年 12月 27日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	40	40

## 【概要】

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、低い確率50%です。3～4週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 12月28日(土)～1月3日(金)

期間の前半は寒気の影響で雲が広がりやすく、東シナ海側では雪か雨が降るでしょう。後半は高気圧に覆われて概ね晴れる見込みです。※詳しくは、週間天気予報をご覧ください。

<2週目の予報> 1月4日(土)～1月10日(金)

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 1月11日(土)～1月24日(金)

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆ 早期水稲

---

#### 1 種子予措

早期水稲の作柄安定には健苗づくりが大変重要です。播種作業に向け、種子や資材の準備を適切に行いましょう。

##### ①優良種子の選別

採種は産の種子を10<sup>kg</sup>当たり、3.5～4.0<sup>kg</sup>準備し、枝梗などよく取り除きます。発芽の揃いを良くするため、水10<sup>kg</sup>に食塩を80<sup>g</sup>入れて塩水による選別を行い、沈んだ種子を水洗いし種子として使用します。

##### ②種子消毒

種子消毒時の袋詰めは、袋に余裕を持たせ薬液が中心部の粃にも十分付着するようにします。薬液に浸す際に粃に気泡が付いていると、効果が低下しますので、揺するなどして網袋や粃の気泡をよく抜きます。薬剤効果は水温にも影響され、薬液の温度が10℃以下では効果が劣ったり、20℃以上では発芽障害が発生する場合などあるので、薬剤毎の温度や時間など使用方法を守ります。生物農薬や温湯消毒も種類ごとに適切な管理で実施しないと効果が不安定になりやすいので注意します。また育苗箱等の資材も消毒しておきます。

##### ③浸種

浸種は発芽揃いを良くするために低温でじっくり行うことが大切です。種もみを浸す水の量は、種子粃1に対し水2の割合とし、水温は10～20℃の範囲で温度変化の少ない日陰で行います。水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度と浸種期間は十分とります。この間の水の交換は薬剤効果を安定させるため3日目以降から行い、その後は2～3日間隔とします。一度に多くの種子袋を重ねて浸種を行う場合は、時々上下の位置を入れ替えるなどして、粃への温度や酸素供給が均等になるようにします。十分に浸種してくると粃の胚の部分が白く見えるようになります。水温が20度以上では、出芽むらが生じやすくなります。

##### ④催芽

浸種後は、催芽（芽出し）を行いますが、30℃～32℃で一昼夜程で行い、芽が1<sup>cm</sup>程度伸びた鳩胸状態になるまでとします。

### ◆ ムギ類

---

#### ①麦踏み

麦踏みの効果は耐寒性と耐干性を高めたり、分げつの増加、稈の伸びすぎ

を抑えて倒伏を防止するなどあります。節間が伸長し始める前の2月中旬までに2～3回実施します。霜や露があるときや麦の水分が高いときに行うと、茎葉の損傷が大きいので、土壌や株の水分が低い乾燥した時がよいでしょう。

## ②追肥

ムギは施肥による影響が大きい作物です。1月中旬に分げつ肥として窒素成分で10㎡当たり2・5kg程度追肥し、条播きの場合は土入れします。

(鎌田 博人)

## 施設野菜

### ◆ 共通事項

---

厳寒期となります。午前中の温度を十分確保し光合成を促進します。午後からの換気は急激に温度を下げないように注意が必要で、特に風が強い場合の谷換気部の開閉は、風下側を中心に開放したり、換気の幅を小さくするなど、換気によってハウス内の温度が大きく変化しないように十分注意します。また、風が直接作物に当たらないよう内ビニルにより調節を行うことが必要です。夜間の各作物の適正温度は実温での温度となりますので、翌朝冷え込みが強いと予想される場合には、夜間の暖房機の設定温度を普段より高めに管理します。

かん水は、地温低下を防ぐため、晴天時の午前中の早い時間帯に行うことが必要となります。また、追肥は即効性である硝酸態窒素主体に液肥で行います。

### ◆ きゅうり

---

促成きゅうりの摘心栽培では、孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期となります。

①摘心栽培では、草勢が低下すると、不良果が発生しますので、早めに摘果を行います。また、採光・通風を良くするために、ひ孫以降の成長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を整理します。

追肥は、10㎡当たり窒素成分で、月に5～6kgをかん水時に施用します。

②つる下ろし栽培では、寡日照、低温等の影響による「心止まり症」が発生しやすい時期となりますので、成長点の状態を確認しながら、弱い場合には摘果により草勢の調節を行います。摘果は3節に1果を除去します。また、過度の摘果は草勢低下を助長するため、収穫節位から下に5～6枚の葉を確保します。

追肥は、摘心栽培と同様に行います。

#### ◆ ピーマン

---

促成ピーマンは、着果の状況に注意しながら肥培管理を行います。

着果量が多いと草勢が低下しやすい作物ですので、親指大の果実の着果が多い場合にはかん水を多めに行うとともに、夜温を普段より高めに管理し、果実の肥大を早めます。

また、追肥は遅れないように注意します。2月までは、月に10㎡当たり窒素成分で3～4kgを行います。

#### ◆ トマト

---

トマトは野菜の中で、最も強い光線が必要とします。内張ビニルを十分開放し、光線の確保に努めます。また、果実の肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉を必要とするため、つる下ろし時の過度の摘葉は避けま

#### ◆ いちご

---

いちごは、成り疲れに加え、寡日照、低温等の環境により食味低下や小玉果となりやすい時期となります。大玉果、高品質生産を行うためには、光合成を高めることが重要となりますので、午前中の温度は28～25℃を目安とし、開花から45日程度で収穫できるように管理します。また、品質向上ため、1果房当たり10果前後に摘果します。

追肥は液肥を主体に、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを目安としますが、吸水量、吸肥量ともに低い時期となりますので、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。追肥は、多過ぎると根痛みを起こすので注意しま

(郡司 孝幸)

## 葉茎根菜類・いも類

ハウスやトンネルによる半促成栽培の播種期及び早熟栽培の定植期となります。支柱立てやビニール被覆など植え付け準備を計画的に進め、適期に植付け、は種ができるようにします。

### ◆スイートコーン

---

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬からは種適期となります。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高目に保持することが重要となります。は種1週間前までには、トンネル被覆を行い地温を確保して下さい。なお、早播きしすぎると、地温不足による発芽不良を起こしたり、桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に、葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招きますので、播種期を守りましょう。来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

### ◆ 食用かんしょ

---

小型トンネル栽培の育苗～定植期です。換気に注意しながら、丈夫な苗に仕上げます。1月中旬以前の早植えは地温が十分に確保できずに肥大根の着生や伸長が悪く、丸いもになりやすくなります。定植時期は地温確保が可能になる1月末以降とし、定植の1週間前にはトンネル被覆を行い、十分に地温を確保して定植します。

### ◆ ばれいしょ

---

春作は下旬より不織布被覆栽培の植付け期となります。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗となっていますので植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には、切り割りして植付けてください。

### ◆ ごぼう

---

9月から10月にかけて播種した水田ごぼうが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、トンネル栽培のものは播種後100日、マルチ栽培は130日くらいです。

(河野 健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆ 完熟きんかん

1月中旬から、完熟きんかんの出荷が始まります。収穫は、着色や食味を参考にしながら開始します。今年は結果時期が遅かったため、平年よりも果実肥大が遅れています。果実肥大が特に遅れている園地では、上旬まで昼温20℃程度を確保し、夜温は5℃程度を目安にしながら、月末に向けて昼夜温ともに徐々に落としていきましょう。

収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15℃を目安に管理します。また、裂皮を防止するために、早朝の換気等により、施設内の湿度を低く維持しましょう。

完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、収穫カゴ周囲の緩衝材設置や、果実の過度の積み重ねを避け、取り扱いには十分注意しましょう。

#### ◆ マンゴー

剪定遅れや樹勢低下などによって枝の充が悪い園では、萌芽のばらつきや質の悪い花の発生が懸念されます。このような園では、結果不良やミニマンゴーの発生が予想されますので、花芽が見え始めたら、早い段階からかん水を行い、芽が動きやすい環境を確保しましょう。また、昇温の過程を例年よりも慎重に行い、じっくりと花芽を作りましょう。

萌芽のばらつきから、開花期間が長くなり、適期防除ができないことも予想されます。開花前の予防的防除を徹底しましょう。

開花期に湿度が高いと、果実に灰色カビ病が発生し、果実品質が低下します。換気や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。花穂が伸びてきたら、ひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。加温用のダクトを使って病気の発生を抑制する方法もあります。普及センターやJAに相談してみてください。

また、満開期のホウ素剤の散布、幼果期のカルシウム剤の散布により、果実の生理障害を防止しましょう。

### 2 果樹全般

---

#### ◆ 縮間伐・剪定

多くの果樹で、初期収量を確保するために、計画密植栽培が行われている

す。枝が隣の樹とふれはじめたら、縮伐や間伐を実施しましょう。

剪定においては、主枝、亜主枝の配置を考えた剪定が重要です。また近年、多くの果樹で、着花不良や結果不良が見られます。健全な樹勢を維持し、適正な結果枝や結果母枝を確保するように、間引き剪定と切り返し剪定を組み合わせで行いましょう。

また、低樹高栽培は、収穫や管理作業の省力化、防除効果の向上に加え、風に強くなることで、傷果の減少や台風の被害も軽減されます。切り返しや間引きにより、数年かけて低樹高化を図りましょう。

## ◆ 苗の植え付け

苗木の植え付け時期は、秋と春です。春植えの場合、発芽直前に植え付けるのが、寒害回避や生育の観点から最適です。中晩柑類や落葉果樹等では、品種によって発芽期の早いものがありますので、作業が遅れないように注意しましょう。

初めて植栽する園地では、排水の良否がその後の生育や果実品質に大きく影響します。事前に十分に調査した上で、植え付けましょう。植え付け準備として、1ヶ月以上前に植え穴を掘り、有機物や苦土石灰、ようりんなどの土壌改良資材を施用しておきます。

定植適期になったら、植え付けを行います。根を十分に広げて、幹の発根部がわずかに地上に見えるように、やや浅植えにしましょう。植え付け後は十分なかん水を行いましょう。

(山口 和典)

## 花き

### ◆ 電照ギク

白の主力品種「神馬」は親株や電照期間中に13℃以下の低温に合うと「幼若性」を獲得し開花が遅延します。1～2月に消灯する作型は花芽分化時期が1年中で最も低温期になりますので、夜温を十分に確保できるように暖房機の設定温度や停電・事故には十分に気を配って下さい。電照期間中に低温に遭遇した場合は、消灯1～2週間前から夜温15℃で予備加温を行って下さい。低温開花性系統の場合、消灯後は18時から1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。また、再電照時期の決定は品質向上の観点からも必ず検鏡してから決定するようにし

て下さい。低温期はハウス内の湿度も高まりやすいので白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、予防ならびに適期防除を心がけましょう。

#### ◆ スイートピー

---

12月から気温も下がり、日照が多く、スイートピーに適した気象条件になっています。今期は昨年同様に天候に恵まれ順調に生育、開花していることから、草勢維持を心がけ、早めのかん水や追肥を行いましょ。窒素肥料を追肥する場合、地温の低下するこの時期は、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。

#### ◆ デルフィニウム

---

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽台・伸長しますので、採光を良くして硬さとボリュームを確保して下さい。低温密植栽培では、生育状況をチェックし、発蕾期から加温温度を調節しながら出荷時期を合わせてください。

#### ◆ ホオズキ

---

早い産地では下旬から植え付けが始まります。毎年ネコブセンチュウや白絹病等が問題になっていますので、土壌消毒を行いましょ。土壌消毒にあたっては事前にビニルフィルム等でべたがけを行い、地温を上げておくとガスが拡散しやすく効果的です。また、地下茎からの病気等の持ち込みも見られますので、調整する際にセンチュウや白絹病が出ている地下茎を除去して下さい。

#### ◆ ラナンキュラス

---

日中は採光のため内ビニールの開閉をしっかり行いましょ。日中は10℃を下回るような極端な低温管理ではなく、生育適温での管理を行いましょ。収穫が続くと草勢が低下しやすくなりますので、液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょ。

(中村 広)

### 畜産

平成26年が始まりました。昨年の反省点を踏まえて今年の生産、経営の目

標を立てましょう。まず、家畜の繁殖記録、飼養管理記録の徹底を目指しましょう。観察の徹底、記録の継続が最終的には経営の安定に繋がります。早速、実践してみましょう。

## ◆ 家畜

---

今月は1年間で最も寒さが厳しくなる時期です。家畜の生産性の低下や、子牛等の下痢や呼吸器病系の疾病が多く見られる時期でもあります。特に哺乳期の子牛は気温が5℃を下がると、発育の低下や病気の発生が増えるなど寒冷ストレスを受けやすいので十分な対策が必要です。以下の防寒対策を再度、確認しましょう。

### ①防風対策は万全か

すきま風が直接、家畜の体に当たらないようにシートやコンパネ等で補修しましょう。

### ②加温対策は万全か

遠赤外線の暖房装置等を利用して家畜の体温を維持しましょう。

### ③飲水の確保は十分か

特に子牛には温かい水が飲めるようにして食欲の低下を防ぎましょう。

### ④敷料は乾いているか

乾燥した敷料にこまめに交換して、家畜の腹を冷やさないようにしましょう。

### ⑤給与飼料は十分か

良質の飼料を多めに与えて発酵熱を増加させて家畜の体温を上げましょう。また、寒い時期こそ、定期的に換気を行い、畜舎内に新鮮な空気を入れて呼吸器病等の発生を防ぎましょう。

## ◆ 家畜防疫

---

平成23年の1月から2月にかけて、県内の13の養鶏農場で高病原性鳥インフルエンザが発生し、約102万羽の鶏が処分されました。県内で二度と発生させないためにも、農場全体の消毒を徹底するとともに、野鳥進入防止のための防鳥ネットの破損や、鶏舎の隙間等がないか再点検しましょう。また、殺鼠剤などを使ってネズミ対策も十分に行い、ウイルスが農場内に侵入しないよう防疫対策を徹底しましょう。

(小坂 昭三)

## 特用作物

### ◆ 茶

---

#### 1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の凍寒害の発生が懸念されます。被害を受けやすい茶園では、防風ネットの設置等による対策を実施して下さい。また、山間地では積雪による枝折れや裂傷防止対策が必要です。

#### 2 定植ほ場の植え付け準備

降雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。茶は、定植後、摘採するまで4～5年かかることから、一度植え付けると植え替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の気象や茶樹の特性を理解した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は排水が良く耕土の深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は極力避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場、水が流入するようなところは事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠、暗渠等の対策を講じます。

また、アルカリ性の土壌や改植茶園では、土壌pHの調整やたい肥施用により地力増強を図るとともに、土壌線虫の被害が懸念されるほ場では、早めに土壌消毒を実施して定植するように心掛けて下さい。

(佐藤 邦彦)

### ◆ しいたけ

---

#### 1 植菌と仮伏せ

労働力の分散や病虫害防止のため、植菌作業はできるだけ早めに行いましょう。

植菌後の原木は、菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から40㎝以下の高さに横積みして、ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないよう被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして、保温と保湿を図りましょう。

#### 2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いしいたけです。肉厚のしいたけ生産が可能ですが、防風垣の設置などほだ場の湿度の保持や、袋かけによる保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の1週間前にはやめて、日和子での採取を心がけるとともに、しいたけが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

### 3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(小田 三保)

## ◆ たばこ

---

26年作は、基本的耕作技術を忠実に実行し目標を見定め、品質・収量安定化に向けて取り組んでいきましょう。

今月は、本畑準備等が主な作業となります。

1 肥料設計は、土壌検定結果及び前作物調査を参考にして行いましょう。

2 堆肥散布は、すじまき散布を行いましょう。

また、大柄、晩作化、グレー葉生出防止の為に未熟堆肥投入は、避けましょう

3 前作物等の関係で、たばこ予定ほ地の準備が遅れないように計画的な本畑準備作業を行いましょう。

4 練畦防止の為に、畦立は、土壌水分が60%程度（土を手で握って広げ、できた塊を指で押した時2～3個に割れる状態）を目安に、最良の状態を見計らって、移植1ヶ月前までに実施しましょう。また、併せて溝掘機等を使い排水溝を完備しましょう。

5 肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に則って実施しましょう。

(井上 馨)

### 内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

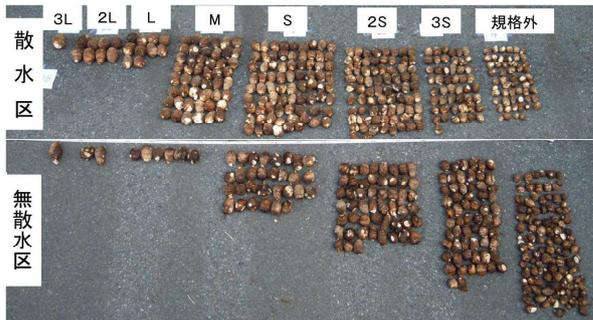
**☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。**

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## なにに農業アラカルト

農家の皆さんは雨や気温などの気象情報にアンテナを張り、効率的な農作業管理を心がけていらっしゃると思います。今回は、天候に左右されず、安定的な営農を実現するための「畑地かんがい」を御紹介します。

### 1 畑地かんがいは



昨年の夏は全国的に猛暑で、宮崎の7～8月の降水量は平年の約2割とかなり少なく、さといもの生育不良など大きな影響が出ました。このような不安定な天候に左右されない営農を実現するために

県内7つの地区で推進しているのが「畑地かんがい」です。これは、ダムからパイプラインを通して畑地に配水し、給水栓を開くといつでも水が利用できる大規模かつ画期的な事業です。

給水栓から畑への散水は、スプリンクラーや散水チューブなど、作物の種類や農家の皆さんの使い勝手に応じた様々な散水器具が利用されています。最近では、無人で移動しながら散水し、畑の端まで行くと自動停止する省力化のための自走式散水機も利用されています。



### 2 畑地かんがいの「3つのチカラ」

県では、畑地かんがいの効果を分かりやすく周知するために、「3つのチカラ」としてPRしています。

1つ目のチカラは、「生産性の向上と経営の安定・強化」です。播種前や定植後、生育期に散水することにより、発芽や活着、生育・肥大が安定し、収量・品質が向上します。特に雨が少なかった昨年は、散水によってさといもの収量が2倍以上になった事例もあります。

2つ目のチカラは、「気象・自然災害対策の強化」です。例えば茶では、霜が予想される日の深夜から散水し、茶樹の表面が凍結する時に発生する熱

で新芽を霜害から守る散水氷結法という技術が導入されています。

3つ目のチカラは、「環境保全型農業の展開」です。畑に水を溜めてセンチユウの数を抑える湛水防除や、茶樹に付着したクワシロカイガラムシの卵を散水により一定期間の高湿度状態にしてふ化を抑制する方法など、環境保全型農業の視点からも畑地かんがいの利用方法は広がっています。

将来的には、県内7地区の約15,000haの畑地において畑地かんがいが整備・活用され、「3つのチカラ」を十分に発揮することによって、農業を成長産業へと発展させていくこととしています。その実現のために、農家の皆さんを中心に、国、県、市町村、関係団体が一体となって、取り組んでいきましょう。



畑地かんがいに関する問い合わせ先  
宮崎県農村計画課 畑かん営農推進室 電話(0985)26-7129

## 向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害全般	－	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	やや少 並 やや少 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	－ 並	感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	並 やや多 並 前年と同程度	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	アザミウマ類※	やや多	アザミウマ類の発生が多く、防除情報を発表しています。この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに追加防除を行います。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 うどんこ病 トマト黄化葉巻 病(TYLCV)	やや多 並 やや多 前年と同程度	葉かび病、うどんこ病の発生がやや多い状況です。 灰色かび病の発生は並ですが、例年1月からの発生が多くなる傾向があるため低温多湿にならないように努めます。 日中の換気、夜間の保温を行い、また、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	カコナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	やや多 並	うどんこ病は多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。一方、炭疽病の発病した株は、早期に除去し新たな感染を防止します。
	ハダニ類 ※ アブラムシ類	やや多 やや多	ハダニ類の発生がやや多く、防除情報を発表しています。寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。 また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。

(病害虫防除・肥料検査センター)